連歌書

京都伏見
梵舜

伊地知文庫
文庫20
145

文庫20
145

宮御公教所蔵之書

本文ハ福井先生ノ原稿ニ拠ル

目録

宗御巻欲古実七拾七ヶ條
京御袖内
京御作
心敬連歌法師作集
灯菴主袖下集
当書共之

伊地知氏書冊

連歌古実七拾七ヶ條

一 毎朝朝祈念行水
一 毎月の内可受知一事
一 肴と云は事 花所文受ふうぬる
一 京都月前之事
一 古北語利句をとお事口傳いろ丹毛
一 當世乃風雅所ろ作ろ今丹月と
付へろ事

一下句一如れる　五口傳
一詞をつけて句をいやしかるべきる
一毎物に自位の外に寄をく事
一云若乃雪に花鳥ふ可付
草木同前しる
一句小之物て作る立句べきる
口傳に死一字利
一古歌先達の句を深く取詞を少可
月事　同詩を取格のる
一人の口いかを加句き事

一云俗ひんをけ俗へきる
一旅をもてく山をるかて花を付
る口傳に
一祝儀ものを古寄先達の句をを可取事
一二人ものて宴の座を等分者て矣
宵る
一連歌出案を面二前をへと心前を
持て新敷て取る
一句をる事を用る
一世をもむを取をるるを以て次

杜山と付て源氏宗流北方丹成人
て口傳
一意丹を述懐丹しるす句可ては
道を付白ふのらめ
一漢式ふ元方ら人のかことを少
ちら我し時ら伝宗へきる
一去れ梢秋乃梢ちを花とみち付る
口傳
一水道ふ為道山数ふ山数伝てあて或
ある句て水道て山数ちへる

一人の田ら為而丹ていふを乗道伝
へる事
一て丹をんちひて伝ひ乃へ〻能可
用ん
一二敵志ら道ふらて心感情を乃為
相ふ　さる所あ
一恵乃ん持一句乗て ふま
て事
一人の行歩乃ちむ志陳道て為事
志相風セ流ふ乃て科答ひ

一強力たくましきうきさまをみむきれる
一二度しかいうみをこの比祝事
一二月再度ん持うる
一毎度姫師み会事
一句丹をまりる時ん持うる　口傳
一百韵紛やしの事
一入かえ句乃うる　口傳
一松乃雪々ゝ丸雲花の表々ゝ花秋の月々
秋ゝ別うる
一古歌と叶哉の京言丹居る　口傳

一生哥　三句めん持ゝ事　口傳
一んを抜てん城ゝもむる
一附句の事
一未来丹悪悪あるべき事
一九位事ゝ位まつきる秘傳ゝむ
へきる

右條ゝお連歌者唯傳一子也
奥の安師　秘密ゝ可也他見堅ゝ
以右実七條七ヶ條者右如丹ゝ上巻丹ゝ
三十ヶ條下巻丹ゝ五條七ヶ條起合八條七ヶ

宗たり我も他なれば三通とも上下
共除又会侍りしたおり　ケ除十ケ除
座作りとそれとおなじ陸上下美ケ除を一丹
明して書付ける所芸能載せ侍りおり伺
そなをとそれ夫来ホ意思所へきを
凡伝命ゑみをほつきも神たーむ色
紀事は二ケ除そを足侍りさしめて設
おなじ丹へ者ものとを作陸書う侍伝
とて爺者乃あやまりをとそしる事
をあるんとおもいて七格七ケ除の内を

弟丹たて明りかうう書かへ侍りし米ケ紀
ホ設を者ふ書ホて侍る時弱ケたき事
少侍る計丹失念ホきそて丹ホ誠丹は
ふ書あやふしりを色とを思事稽古の
ためのをなりさて他人ケ見色ケ次
〈〈

一邪路ふ支
秋事ふ紀ホのふ
船ケ〈ふ月ホを業て紀へきケ
一今川ケ別書侍一巻丹一刀業古今源氏

て寄合師三代集さん乃程新古今ハ
詞の風情をせしと常みもとゝ
一　句ハ如く乃理を立るゆへ乃れん侍
て〻同安句なるゝ　たゝ十七字乃れ
内ハ〻いとゝさ免人乃推　常てて乃理
を立へき程ハ可然い
猿さ言ひ　合場乃夜を明く
猿さけい　房乃ゝ秋乃句
明方と句と立字造能て陽方利
猿さ常ひ　合場乃夜を更て

猿さりい馬ゝ祢ゝ　秋を立ゝ
詞くと叶ゝを面白くい　三廣
邪風乃て拙乃ハ陽を者とせ山厳
免一ゝ句ゝを秀逸の所謂也ゝ
神恵を以て書盛乃弥侍らゆ
一　有文言ゝ句ゝ
旅宿恵を以ゝ　宿とひて
老なれを拙乃て悲きゝ
去常て弥生ゝ山と成ゝ
悲ゝ　さゝ程ゝ秋ゝを逆ゝ常逆

一有文之事

- 雲をよしやかに紅葉の
- 夜球待をおの為成月あて
月乃高く高く天極る明る
- 秋風の夜毎を沖に吹行て
萩野球人並たして吉野原
- 伊豆吉年は秋雨月の秋雨
海の上あらくして船人
- 吉乃を風を少して松を吹し
やう北秀逸の句

一連次ようなり俳神者の作して
二条あるとなりたるを新き
- 山人は新の花と杉深雨
人清らすくはの山人の新まま俗花の
枝としてこそ世そて雨四人
一先年市主京の時あらまま中は蓬
江徽而実ま作しちる球は年ま之め
新は枝風情魔眼何ろく仏神を測
吉志ろいき一神をて
夢ちを未ろし蓬を紀秋ろく

・火王入てなむ　さを鹿や秋の月
世をさして人とかなを成ん
・秋ちまて俗言葉に拙ふれを通さて
よく〳〵古王更の中に
一秋を庶子見の中に　むつの花ちるを
・風の吉み先に　秋乃んが
亡月月うを通ひの事さを人うを
・花みを見て風　ちをん
・切の数て風み　弔ふ　秋本の系が
結ふ列あるへて

一秋の白化文字なハ枝をさね七文字なの
腸てを　秋に成いを　和に和を
陸さうをあを　長阿句
・陸中に旅の　陸中に旅の
・山を紀暁の　結乃勢少多
色を七文字に
面を安て
・山里の日　玄風のを
風をて　霧に内み
・山里に本乃系の　庵に面み

乾を祈のため

伊勢国司

[illegible]

宗祐左判

○宗祐袖内

一連寄ゝ大方秘事ゝ[illegible]

[illegible]

[illegible]

一宗会を持る時ハ[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

連歌句を行の事を定て作して
句を句を行ふ抜り行き事既馬道
らとなりて古くしやうの紀句を
稱ぬり以ぬ抜とり付迷た
とのはゝ寄合みうゝ寄抽物寄
合えして丹たんとお迷ちくハいつ
らなり
一上ま句をんなり下句ハ付と二条家ハ作
を行ぬ以ぬ付とれさ云ハ人稱
なり下ま句を寄合をおいて句を作

行ま寄合をよく付迷ゝ句れ林をんも
始別句り前句ま作に付ま作上ま
句を寄合を指てんより云れより行ま句をの作
ゝ合ま出来也又を前乃句れてみたより
寄物寄合ま寄迷ゝを句乃行より
句を付也抽ゝを上ま句たより下ま乃
句を付と卜なり
一ま寄ま句ま作ま又いゝみを秋風
ゝ中一丹を前乃句れ初中二丹た前の
句乃て丹を第三丹をんより高へ寄

又言はんとするに付て句を力とよむ
す寄合を付へし
一前の句にてみたす事と中八前句下
の句にて我付る上句を付みよとう
句にて寄一首よなるやうに付へしたれ
も〳〵みな〳〵すべ前の句を知れすも也
根本寄一首をあて連歌は上下ふ事を
故也陸地と連歌八寄と八少違ふる事
あり山ひとと言ふ城上まと言へし言ハ
上下共ふ一ち明を相ふまむなり連歌

七上下とんはしへし言ふを化者一人あり
是言ふハ表人ふ故也付句を以発句を
して言ふまふ八句連言ハ表日なりそ
れ言ふ句を連ふ事明いふを句を
又ふ明句をとる句を
人をと上句をそ
一連言のひ中句にて表方口付ふと云ふ
付句あり句句
風し花ふる花城ちぬ也
山屋と言ふ表ふ人をこて

一こゝをのゝしり高
せと丸殘るや又時雨降
一我とこゝに帝りぬる身を八思ふ
一そゝとこゝみ付稚そ八こゝとこゝみ月ゝ也
月乃高きもく風そ少ゆ
一海の面ゝ小ひ浪の高を所
一又の久しして
一行く秋や新ふるん
一春し来ぬ程山城ふるんそ
一雪ゝ水城ふるんそ

一時やゝ音かきり成ん
一又を春歳と思ふ結つきて
一八月付板
一かなる里を又孫乃琴
一程城ゝを月と霜と神室て
一をみんをみて付やゝ
神やなきゝ丸そを高ふん
一ゝ稚丸光又を城れむ月み
所の永ゝ月ゝ也海ゝ神
一宮ゝ月海丸物をゝと何て

心そをとれむし　丹んち海

一 光なりき政今を神代のむかしに帰
宵れさ喜るみしゝ夜の月

一 我らんはくし旅よと人をあて
川添の色丹を来や立ぬらん

一 このすみん神とをとをつせれ山
多年法殺寄れる奈を大こい針とゝや
いろ丹を侍用ん丹をへて
沙弥宗柳

夫連歌を和謌の道としてもたたく異
且此葉久しき時より諸神の納受万人の
賞翫此此年に至りて能と結識知る人々は
御用むる程に此姿実に此様に侍らむ
何の題丹を堪能たるむとしそ波とれ
好きと申侍りぬ欲ニ一二にてむ家族を
そろく八筑波山乃異なりと弁中村蛤洲
の内外とりあ諸秀句と遥遊なる孫を寄
をめきらり時とも残しとせきて中古
此度の作者三人の句と少なくありけてたき
宗祇法師の約束をかりし乃くちゝ志めし一の

たて作りたり

牧陝の連吾

初てそ梅を探りし三木裕

一書未を郭山に山里人の友夜

見る燒き山家とは寺城之生しるし

匂ひたるさくら郭なれ月未を

前れ匂ふ匂ひ言葉と侍り而ふそ法

きそ法ふまつりし新句

一吟やうとりれ名もしき梦

一船そ須さ夜又ふ月出て

見せさ夜ふ鳥は訪ふ詞れ月雅

ふ所一句ふ乃さ云て句ふ郭ふ祇と

云て句ふ似合せしる

うき別とた去りそめよ

一古郷の山と称なるみ郭ふ

激ふ古乃前山ふ見まとな漆そ

ふに家人家いそ函ふを思ハさふき

旅のあたれを拘とふあり

一ハ来れ家山訪れ神へふれ秋

人の見られ尋を出さ

一 袖なるて祢元の秋よかさ所方面
　　付文を走て此るく迄歟
一 笑の立性北郭家北燈を忘れて
　　古色そこ[illegible]乃山麓
一 松本引元を北奥北夕風
　　[illegible]北世乃号をよりすを家
一 加賀廓今年おりを松北風
　　以上文句寄会一を所　[illegible]人様会[illegible]
　　詞性情乃[illegible]て句こ丹毛言傍也
　　秋ノ恵　[illegible]そ[illegible]を京紀

一 四ひ祢て[illegible]人を北[illegible]号ヲ見て
　　見やけ[illegible]き祇碩川き海有利
　　歌有[illegible]北[illegible]乃毛[illegible]
一 [illegible]人有[illegible]き[illegible]めり[illegible]て[illegible]
　　見文[illegible]き神面[illegible]伊勢物語丹業年
　　宇津山[illegible]俗約[illegible]切会て[illegible]人と会[illegible]
　　詞[illegible]城多[illegible]ヶ[illegible]
　　[illegible]
　　あ[illegible]天性上[illegible]
　　[illegible]也

[illegible]

一雪駒乃見えうちの紀箱根山

見ハ一句ハ[illegible]付ける[illegible]

一物かゝる人目之のゝみ道そ

見ハ多むさ紀の櫛衣見ふの龍りきり

去れ去れ寄ハ去る我付ける

今や[illegible]り[illegible]寄をこそ見道

一川去れを紀旅祢去床乃山

道又床の山ゐるいさや川のむ[illegible]なり

山一句り川と云ふ八ゝ[illegible]ハ[illegible]

七りをこそ奈日去とゝや[illegible]道

一いと[illegible]日[illegible]門お[illegible]よ

見ゝ日去ゝ[illegible]ゝ去ゝ[illegible]ゝ[illegible]門お

花よゝ付ける奈日指ゝ三ゝ[illegible]ゝて

いゝ去ぬゝ云ゝ[illegible]

[illegible]むゝ明ゝ[illegible]世の中

一又や今[illegible]伊勢乃[illegible]ゝ

一昔ゝ廿一年ゝて伊せ去[illegible]ゝ[illegible]

去ゝ[illegible]ゝ去ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

ゆやうと云て誠なりを拾ぬ人多れ来れ
ば送るあひだ人事云て弾指の内
句数百余に成り

月宮殿とあつひ歳を友に分
刻々やもくとてんさき引く夜也
聖寺ゆ僧侶紹て冴る月と言りと云
詩乃人を付しり

うき世此体を生をやる迄
・其外乃夫れ人迄此宮の月

是人を尼をくと云て海を侵事なく
方利寄合初んを松 ひよ〜さる屋き
りあるす

結ぶそ高此夕へな梨三味線
・祢ぬる夜の枕此暁り手をへ高
是年おを一を鏡をこは此ゆ〜へ歩て
去年り梨と初んなるへし

・右ひくうて高此夕へあるた
迄人の引人髪をゆりみて
ん人を付しる白やし

扇のうらをみるに紀友の
見たる扇の詩に梅の花
に梅花紅亦くれなゐ寄合を詠ずる
四月五日とある立花に付ての句
親元
・腰に指るゝ古代文字を元にして
見たる文庫の方に守かしら乃ん親元
京の序歌を為て付る梅ちれぬ如ちん
粉宵を志る所白せる衣裳を著給ふ

角あるその中としそ見る
・目を引くを見た事りん松を詠や
見えすけき武ちか乳袋を詞を
よく少し牛と云ふ乳見と云ふ
事り所取城云ひ世り神変なり
角ある目をいふ加乳ちゝ云ふ鬼
拉と云ふ宵白を徒ちれ
河内良行連歌
・萩の吹風
萩の吹風をなうる此姿にて

[illegible]句 秀逸の祝ひ利
子城里 高の方を[illegible]
一市[illegible]茶[illegible]焼野[illegible]
句前句より[illegible]れた山茶花[illegible]
[illegible]一句より逸た人の事を考へきた
事

逸[illegible]花の枝[illegible]
一山[illegible]次第[illegible]
前の句は花乃枝を[illegible]
[illegible]く思ふ[illegible]利

[illegible]句 義[illegible]
一[illegible]句の[illegible]を刻より[illegible]て見
[illegible]のまゝ[illegible]
お明[illegible]
[illegible]
[illegible]句は[illegible]実[illegible]寄
[illegible]く尺[illegible]利

三十[illegible]
一[illegible]文字を拈[illegible]
[illegible]乃三十三身は[illegible]

三十一字のみよれりて行ゐ左様を上る
時故に千年の乳力みんを祈ゐ云
諸有り

為あるへを続あり此通

一玉ゐ山祇と申まうすもいんを
是を神祇神たり上座の人を下座
人を初んも板ゐも主を婦ふ所ゐを
霞ゐや月の気きをあ所ん

一花の走庫ゐ花山の外花ゐ
是ハ上ゐ〳〵しく走そを主を可婦ふ

一郭ゐすをゐ花ゐの山ゐをそ少
う〳〵地をひゐう〳〵拵て
一ゐを東のゐ水ハ月を前
星花ゐ陰や元火ゐん
一いゐ乃ゐ拵ゐ鹿のゐをそ
上三百花祇宮会を法〳〵み加番て面
白

親のいをやるみあゐん
一狩人乃夫を紀の鹿のゐを山ゐり

毛を異にするよりは性質也

第四のものを命法なり

・柱木などを焼き中央のうつろにして
毛皮などを云ふ家思ふうつくしき所也命法
きぬるをあらわす　夕の煙と云ふ世常
となるなり

寄所紀行をを作法

・猿はのいまだ月を見て
猿乃名は月を見てさるん猿は池の
う猿なり　常の女の身を指す名なき

多猿　此名称り一の矢さきにて二の
鹿と称すると云ふ　一句をもて二の猿
とは句さきの名也に毛をもて孔のうき物
いく変法有例をを指す

・舟をなぜ孔の砂みかきつて
技事人さ〜三艘のけりきたみ七生分
と指ひりむ事をなぜをんしぬ情
あやそ法と云ふみ舟をよをせるせい
らぬんをくなるべし

周門連哥

山のさゝらをたゞぬあまゝの
月を殘りて宵夜の
月あまり所なく夜の海を初めの人の
を似合へき白也和尚此句白丸神
とゝり色さ白よりたり
宿と北をめる夜の月川原
あたれな河色とやうを考ふを紀
と云り月業枕たゝりさん感わさかり原
あたれ色さを山屋の秋
旅世りの白りぬ旅のたりめて
さくぬ物ぬ旅北行き
風市言を吟乳泊り船のまて
岩八寸山るそを理ちゝて神な
の先ちる
浪之河の陶の夕雪
里や宿舟の中業人を所
岩を行とてを安丹何ふへし

月をありてこそ夜をつくされ

一鶯の内は清くて梅ふれ
ぬ花一句一異の言葉利
梵灯庵主連歌

一本は秋吹風の色もまた秋の哀さ
舟初てやもれ波をあり物を

一海ちかく出る船の
又色にのすみ乃ちいろ世人

一法を守人とも今を生きて

山三句淺さに似て深し村雨見れば
を京曲也法を守如庵秘なり
京都連寄
宴文をたてそいたれきて

一龍田よりそ通と見むるの山桜
宴をたてこれ山桜を見待一
異乃神りやはしむ
山河り竹のあら橋しけて

一宗は廣りみ洗ぬまろん
ぬ花前句小ぶ色と通るき異あり詞

とをおけて安さんを付るやあるか
ちをを自慢みあるをを世みゆしるを
ひまいあるを屋さまれとをいおの金云り
云ふて何らをを走れとを上下二匂お
もひをして兵部節笠北をさん
丹ふまんり侍り有利

家神

心敬僧の連歌脳脳秘傳集

敬白北大事大切ものなり さて云とまり
モ外のなりひあをを十三乃切なよ
別かりにはををを連歌をあまりをを人
のをををと思やうにをを脇の白北
事敬白を穀んをを好ををををて付
白傳なれよりて仕連敬白みう
をを詞あをを脇みをを云をを脇の
白北事いくをををを花月みひるを梅
をを梅末霜敬を表を校を梅卯花を家

秋風の靜々吹て梢木枯枯風
かをやしの方利位みの匂ふ此時
神ともアやうみ付りんと思て脚みを
名ゝ時くゝ方人とゝ
ゝかゝ脚を付る事に傳ゝ云花ゝ彩
り郭ゝ見いう為きき匂ほきとゝ
匂ゝ付へゝゝ
卯花やきかゝ卯花
見附てんの付匂り脚乃匂みよりて
穀匂とゝ方利おを見ル通位穀

匂りかやゝ匂ゝうゝひあゝきん考ゝ
をゝれきゝ楽へし穀匂乃ゝ見て み通て
寸三ゝ見て匂り付へゝ次さゝ
梅ゝ考をを見ゝ
ゝ浅く根を見ゝ乃程ほ
見ゝ見て み通方ゝ穀匂脚みより
て寸三ゝ見てと穀匂利
一匂きゝ浅てとハ花ゝほの時みん通
大事ゝ見お傳方
一穀匂ゝんの家を見ゝ頃初の位みおす

年始の礼祝儀の時に成り
大なる婦人の家いえをあるとも
まづ先に来たるべし

道
場
法

先に申傳せり宗上の羽織三丈八
前句又付を少しいまを年賀を祝ひ
べし
一恵乃連歌はむかしの事いまんとなる

やうにはべし恵みハ男の女を結ぶなり
恵志ゑんとハ仏なり恵みとハ拙ハ父母
ときを世ゑ教ゑ一世みちびんとなり
こう恵の本を世ゑ白ゑ教なり
・恵志ゑんとてゆるゑみゑゑ教ふ
かゝる世ゑ(き)世一人ゑまゑ拙み
ゑ教ゑ白ゑ教ゑ連歌を付る事ゆへなり
・結ゑゑ宵ハゆゑ志きゑゑ
先ハ義ゑ白ゑ世四会ゑ祝ゑ世ゑ

人を待は句調たる利人に恋はるゝをこそ言とも
ん着る事秋節に入神也より風神也と云ハ
かゝれ云此故を序下へときくも文ハ上略中
略下略ともほ〳〵ふたれ神にてさすら東寄
む神てむかし幸にかくあさし雅しくして子
径の花と花の子供と云事の執して各別
なりいゝなも上にあれんとなしりすして分
こと之一句に神明とも連歌にあるへくも
又風流にて逢かれて人にあてしかゝるふるす
下にも此句にみおほし花や也て思ふさて儀

とも見えしと云て意の句の如き也すま
思ふなりしもて此月にみとふんはるへしいかにも
去の座とともなこうきて似身に出也鐘の声
鳥れ鶏も告る夜も寺て此ハ言ふも
よかしほ逢也ても又読より祝に鐘きく
ハたやと寂夜はしき鶴とかかれしむかしを
へしいかもふ逢も数とこ咲て名残と
去年ハおもたちけれふんたるへし句を
哉也

一人乃ちくかこゝろと秋ハ満ちきて

やうに書てゐる。扨匂ハいつの日を何の
夜を我ハうゐ知て人のゐうこゝを知ぬ
約時を夕より明ぬ城を今ハ月風を
をへし見ゆ見て恋ゆ祈をを付る月
上の連歌ハ絶句ハ絶しゆ恋
文を新枕のとゝ匂乃枕をへし
恋ゆへのおうこゝ海ゆゝとなり

天舟をよゝ書ゆ北ゐゐ川
古言ハ古ゝ川ゆゐ上を弱ゐん
拙ハ不ゝ我ゝ身なり言ゐ見ゆへ

乃後を女採ゐ滅川の名所ゐを紙へ
ゐ別をへし有ゐ恋二匂ゐ八三匂月ゐ
ゐ見れの恋球付へ付ゐ書ゐ結ゐを
別ゐを以ゐ書き匂を付へしゐゐを

かきゐなゐゐや神の恋ゐゐ
恋乃匂良をすゐ見ゐ見ゐ紙ゐ乃名
ゐゐへし迷恋の匂恋ゐ紀世を思ゐゐ
を枕ゐ習やゐ有ゐ八月道を迷ゐ
道を名ゐ名ゐ名祈道を塘の姫とれ
ゐゐ乃ゐて拙ゐ名ゐ名ゐ名ゐ晩ゐ少晴

花を横ぎるみ山を見てゐるうち
夫の述懐の詞ばかりもをかしく
半ば思ひ出されてきたりへを思ふ
こゝろのうきはしなれば
一梅あるかぜ
花をゆきかふ
梅ありあるかぜ
ゆめ
ゆめ
夫の述懐の詞ばかりは
前略

うと降るくやうなる美へし空のうき雲松杉
むらくと次へし
一今年五月十日の夜月を見て
はなのやうなる月おもしろく詩を作り
一神祇の句を我ん〻思ふ事を叶へる
とんを句を詩ふ時ハ先神を切と句を
を一寸ほど紙を千里万里境を隔て
もん通をへしいろをん祇ほそをん
けるハ徒ら利多神をめつさは
くほんの花をかけて祈へし

一杖数の連奇を作み大事也仏の法花
かれを汲て絶世暁おきて高き乃道
を思ハへし又楽を句てたて遠を切り
仏を思ひ光を得ん一切衆生笑ふ
をあり竹をう〻多み絶を絶て
尼思ハ〻ぬ法ほん得へし天教の五欲
ハ仏法ひて絶き也暁の行みを云
ほかう道を汲て彩ろ日を見ほ木の月
五多へ今も風情をへし
一旅ハいう五をんをこ紀趣ををへし古里を

七月廿五日　都を出る別を惜まぬ
人なし　四条の人々連歌興行　夜に入
て　能太郎　東へ下る　夜に入て出る
　扇　扇　扇　扇　扇　扇　扇　扇
の色　白　白　白　白　白　白　白

・廿六日　雨　雨　雨　雨　雨　雨　雨
　今日　雨　雨　雨　雨　雨　雨　雨
　利　道　雨　雨　雨　雨　雨　雨
　　　　　　　　　　　　　　　
　　　　　　　　　　　　　　　

・行　雨　雨　雨　雨　雨　雨　雨
　　　　　　　　　　　　　　　
　　　　　　　　　　　　　　　
　　　　　　　　　　　　　　　
　　　　　　　　　　　　　　　
　　　　　　　　　　　　　　　
　　　　　　　　　　　　　　　
　　　　　　　　　　　　　　　

をへて一昼夜をいくら実夜を約空を
孤舟をたゝかせて又船の帆をハ
如くなる元を当るかゝり漕ぐ舟
の筆とを云利浦にひゝて云来所
して浦にくゝるなりなるへし塩浦
此旅ハ大事なり然る寄へし
一夕の逸書ゝ社連歌ハいろ和をさく
して冒頭の句を神をゆし山ハ
ともうとうとうふとを風情をへし吹
風まてを夕ハ我ゝうきまさ地ハ色てい

たゝりもあれたりたゝかをて
一曙胡をて冒頭詠をんを添うき船
なを色をを海川乃家をにも志ゝ船
さむやに色をへし地して連歌をを
を見寒を嘲を述懐の句ハ
詠をハ帰なりあゝに寄会所
とを色一弦をたゝかひへし二句目を
句ハ句へし又付れを足字
逸字をて法をあり又独付て
風情をうとをををとくを

一秋のあはれ始まし乃古 雪と云句有
一彩霧れ萩の夕風けし移て
け句ハ其に萩乃夕風と現古てと付る
其ても前の言葉をとりなすかへり秋乃
末の富士の古て雪と走見してハん詞を
とよ新ね五楷ちり枝句ふ古今の花有
流彩あり姿もよろし文風乃慮まうき事
の立地の本也ひを付あへも宵今なら
其ともは古てし居るへし何なる萩か富
古みある今き乃句又ならし文学今の想母

たほうをむすめむすむ那んみ本ん残さんして
まる飾し羽の宵たゝりそ付かへらひぬ連
色菊句み流れもんみ信さ用ゆか連歌を
兄んるし代の流れ流るゝも前し文上手躰連ハ
それ句よみ透逸の句色形さらなる
も前句南句よる人今て又連たんむ
時付也下手も立ちらく我已けくしも
人をわりして心ある風情をなく行と
思ひて形へきるるらく句れ祖を
三寺て也書有 文よ形し体ゝ寸筥を

一夜の村時雨の月と八清らみを月と云る
神なへし
・村雨をいくみ降色を月見て
・もし時雨とて月をさや市さ
夕をを出をきてゆるとなくを何れ
みを降くくんへし
・夕ちれ雲はなき月をく
一月は神之と云句をすを見くれ
を夏月月乃とうをなる
・みとりをを鶏の鳴る月み神を

又時みあて月を見をを古美古代思
をを云字をを結て八月をうをを地よ
・かあ泥は秋より外の宿を和
形を山中を月や行む
一五月雨月をを月の雲を時月形色
ををしを五月雨月のを形
月を雨刑
・五月雨を夕を降をを時月形色
いつ降を雨ををを仏見の時
雨つを降を雨を雲風を結人降

一咲き咲き初めて乃風を郭
一去れ夜の月をおもておもかんと去る
中秋　思を世俗今りを弱め去れ夜の
おもかげ月秋を去く物を去れ月に風有
時を物かく去れ月に風よりもせんあ
去を去所の月を荒来秋月有
を吹ぬるを吹ぬ所り位加を此人を及ら
さし秋を去を考人去し
一其の夜乃月沿きに秋を去し又
ぬを去し秋去沿へき去利

一此秋の月を定を場とをへし月乃氷と
立を去を秋を立又光の陸去紀鏡此
去を去を秋を立也白毎日習り初此
時より秋を背去を去し去く生習て
法事也
一祇光は三乃人去り三十去年生て此
祇光のこある風情去へし去すより寂
まて此祇光を去きむりを去変去ん
を去し七十八十九年此と常秋光を
ゐを去ん常へし

・祢宜を勤める家に生れて
連歌を勤め俳諧
の趣あり俳諧
一雅句を少あり八せり化理のこと
志る句を能前句ぬんを元とをして連歌
を長へし上手ハそと守ちれ

・さく花ぬ花ぬ梅乃木乃ぬ
・咲りぬ里人を待ぬ花の陰
・うき人のむとう祢ろ八よを問
・結ぶ育をいそ人と定め祢て

山梅を手たを里いよを待
・木ぬ系おる祢宜の山ぬ力を拾て
・祢宜の加けまて月の音消て
句を十まへ付て月の音消て
句と云を
・山ぬ嵐の上り鳥帰て
・鳥を句を写とやく人のあるちん
・沖津舟多よを里を加ぬ唐写て
見を安を中ろて及ろ

一夜分丹青ノ筆ヲ上ケ侍テ丹彩
分丹彩ノ匂ヒ
一考ヘ見ルニ絶水ヲ分ケ海道
かやうめの匂ヒ別ヲヘシ
和語下之終　人敬左判

古本者文明十四年壬午七月十一日
其後之本者天文三年甲午又月日
今之自本者文禄四年乙未三月日

時春写前　家長拾六年辛巳七月日
自本他本三通見合畫写物形

△灯　尾主袖下集

一花乃兄と申ハ梅の名なり花ハ梅
ものを兄と呼ぶ故花兄と名なり
一花の弟と申ハ菊花也菊乃弟木又
桜ハ花の姉也乃弟と云ハ云なり
一菊乃兄ハ桜也菊乃弟木又

一敏雄に問さ刑部は秋の花を詠ぜし歌集
中美芳を取て題を求まる
歌和名抄に秋の花なり
一菊と云字を秋之と読むと云り 殺句
一花色を菊と秋しへ乃盛か
一菊は花色八月 九月の酒は事也 九月
の白き
一菊の閑と山路なる花の如く咲
を閑と云り
一雲は上の菊 雲は井乃菊 是八大内の花

一菊は大内乃秋句なり八月九月へきや
一花形は三乃山路也 浜乃山路 宇治乃
山陰 小野 山路 山路 山路 八月九月山路
一床夜は花 日本 住吉を松子は吳服也
日本 花 花 拾遺 住吉を松子は吳服也
一山橋 花 花 菊や
いつ迄 牡丹 事や 和歌の殺句なり
月 紙
一春 花 青八 六月は花也 今と雖 七月
一七夕 麦 八 織女の事也 七夕は水の名 河

利勇集丑あさ姫　機集姫　秋去姫
一恵姫　さくら姫　織姫　百子姫（生母）
七夕乃数句　丑いより
一川畏与の吳名也　三人乃数句　七月
与丑
一渡やうたて星此名ある川　清こ
一鏡来れ申　四季可ゑし
春ハ大根　夏ハ紅　秋ハあさみ　冬ハ松
いたゞき　本　与あり

○大根の歌　りふよりも我を餅乃かゝる茶
さ紀さゝへさかけそ　ゝ
○紀乃寄　夏形ハ多たゝて見猿茶
只咲花のいろも花ハ外
○あさ紀寄　あさかのあ形花此鏡茶
物
○春乃寄　冬野ハ月を春此ゝて見茶
松の木ゝを志たゝ　ゝを志る
一さゝ花ハ　ゝ事去此茶の前おゝ　ゝと
一従侍　ゝ　治定ハ　ゝ　ゝと云茶と　ゝ

又ある所にて海のいくさありしに人丸たんをうちぬ
給たしきん

・さいたまの国につくしは去年より
かりそめとて雑子をうり侍り

・あしがりの野にあるさいたまの
人丸の墓あり 若草の

一次戸の宿舟にて淀屋氏次戸七屋に下
宿より出舟にて淀やより時分
出舟にて澤海の宿にて天上人乃田屋抜
へ抜ら市に着といまら出ら抜舟とハ

立也山谷出也船あるを山谷と持船へ宿次
の雑船にて四ツまくり 古哥 み

・船宿とよ出舟にてよおとりて
次戸の上船み雑子をうり

一次戸乃風俗と云ハ源氏次戸里そ
当乃出を送り船ひらり 五月雨 花
市しそ次戸花菖蒲の菖蒲
と祭船也風をさくれ出たやそ
み和ら市乃しかれ 元と次戸の風祭
とや也風祭雑あり

一扇と云ふは天皇八月一日より事なり
天上人色々月一日より扇と云ふ也と
扇を云ふなり
一玉葉に菊と云ふ句あり扇を云ふ
玉葉の菊と云ふは大内より扇を
送れる也と云ふ
柳を植ふ云ふ
一白童子を月一日更衣の事也天上人い

月一日より初めて衣を着て云ふ也
色を白色とも又衣とも云ふ
一弾琴と云事二条院に弾琴と云
事あり又美素に弾琴と云
源氏の弾琴を云ふ
一三年まで飼ふ
拾ひ捨てふ
山吹源氏より又源山吹と云ふ
本寄美素にあり
一源山吹の歌美素の秋に出でき

物ヲ生ス月ヤ上ヲ下ヲ
一鹿島ハ鹿ノ島ナリ也秋也ヲ極熱
秋ヲ也ヲ 於田ノ山ノ紅葉
如ク海ヲ大和川ヲ
一大和川ハ有リ泊瀬川ノ末於田川ヲ流
今ヲ而也秋ノ事ノ法ヲ時紅葉
と見ル 紅葉ヲ用ル而ハ庶ヲ用ル而ハ利
一海ノ船ヲ中ハ於ヲ海ノ事ノ
一武庫海ノ神ハ安熟ノ岩海ノ神ハ兵庫
於ヲ海ノ於ヲ法ヲ有リ

一浦海ヲ云ハ人ノ居ル於ヲ海ノ船ヲ地ヲ
於ヲ者ヲ海ノ義ヲ云ヲ有ル法ヲ
一橋ノ義ヲ市ノ海ノ御事也 橋ノ義ノ義ヲ市
ヲ用ル 小野ノ御ノ社ハ橋ノ義ノ義ヲ市ノ 去程
ヲ 橋ノ末ノ義ヲ
一月ヲ月ハ外ノ義ノ御事也
一竹ノ都ハ海ノ法事ヲ 海ノ義ヲ書
ていさ社ノ義ヲ也 賀茂ノ法ハ
寺院ヲ
一只ノ服ヲ あやを 寺 毅ヲ月ノ月ノ咲

・呉服うりあやめハ吹られ新たなり
・呉服売りあやーやと言うと称れて
一秋うり衣おり〳〵秋衣也、七夕れ別の衣うり
一祝ひの織女糸也秋乃雪をおると岩花
也七夕乃あ雪の事也秋ちり
一道乃琴引道乃三琴也、大内小七夕ハ
多河琴と琴と道ハおりをと道也秋ちり
一百ゑ池ゑ百八天川の呉服也也をくゝして
七夕と祭時百乃土笠ハ水を入て名庭ハ
筒を考ハそ二星れ乳と後水の上ハ

意物を焼てゑ河流ちり也と百ゑ池と云
流ゑ乃命百ゑ百ゑ池天川名意あゝ也七夕ハ
百ゑ池て付ゝ秋也
一星乃家ちり乃家ハ名意あゝ也秋
一庭ゑ流ちり流清川河を天川の事ゝ
七夕ハ
一あま乃岩戸ゑ事ハ七月七日れ事也大内
ゑ家の宝物と記事ハ積て七夕ゑ信ゝ
流ゑ事ちり織女乃發句ゝ天乃岩戸信ちと
ゑへゝ何を秋ゝ

一宇治乃花園ハ春むし秋こ源氏年こ与れ
ゆゑみ美れ草れ花を強て育一日ヨリハ
花を摘て織女ふ自為ふ事こ宇治乃花
会宇治れ家を宇治ハ花と云ハ皆秋ゆり来
たりと云ふ事ゆゑ也と云ふ事
一志賀れ花園ハ梅花こ宇治れ花園ハ
付而かたるへし　大学ま

・さ浪や志賀乃花園の春変り
むかし人のあるとそ聞
一難波乃勝みとハ云を志而治芳ゆゑ

を花大臣と云ふ事のめされる事こ山吉年
月を経て春を為て為て為て為て為て為也
勝乃志賀乃花園の春と為て為て為て為也
の星み勝乃志賀乃為て為て為て為也
本歌新葉集ゆ
・いとゆゑ小雑波乃為て為て為
月乃為て為て為て為て為て為
一志賀乃志賀志賀ハ花れ志賀れ為
志賀乃花園何を為て為て為

一海乃都和紀北部之を去り長崎に至る
あを津野岳を去り若之軍津野と唱て
讀之
一軍津海日本北東之日本海と云
のかゝる北海之極に軍津岡と唱
の俗大切なり
一筑紫九ヶ國を筑島乃國北筑島の海を云
を渭小者い者人の住居に付東方くと
中多年住居之者と云ふ
ふ見迄大日本筑島北海乃國之ゆゑ小

み海をゆく北國も海北付へし
一長崎乃海より三の浦り新潟筑紫筑前の
國松浦と中原也 長崎港居船の泊所有
松浦乃長崎付会列
一壱岐乃境の長崎八幡宮松浦さよ姫
長大浦乃境大浦 壱岐さよ姫
みの長崎乃境 壱岐さよ姫
乃見者乃境 るさ山みあり神之陵
れ之長崎 絶命恵死して
とゝ何ゆゑ姫のくあるゝ乃みあり

あはれたち女房の衣をとりつきぬしたる袖
なれ衣のせい云人あまりにて文武天皇三年
その頃都より此渡に松浦小夜姫を以て鏡の宮
と祝ひ申せし鏡の里ありて其後は故に鏡
志宮とも申すやさよ姫の本説沈むなれ年辰
大臣となる時の御門より君の使として遥か
にかけて此より小さよ姫を妻にみて住けれ
まつらさよ姫と伝えしは何かんと難り別れの悲しさ
領巾麾嶺の松浦なるひれふり山とて人の捨
まつりとも其事なり 又天正元年
庚辰三月下旬

一 唐津人ニ尋ネシハ鏡宮ハ鏡大明神トモ申シ
サヨ姫ハ多治大明神トモ申シ但鏡宮ト同一神カ

みる所鏡陳に松浦領巾麾の松浦とりやまより仍ては往み
さよ姫の事を記すに鏡の山鏡の宮は居
住と申し候所みえたり さよ姫の衣は此松浦と
申す山ありて衣は申されしと申すに天平
ありしを宮のたいらんの内に箱をさし但方に
まさにあけてみえければ年のみたりを示の人み
記すは鏡の宮にて申せしは尚今者の事にて此地に
浦のさよ姫の宮のさよ姫の御部りとまえてなる
延喜何とそして人をよひおはしく
記すさとおもひかやく志候時よく御辞と申

作りまゝに成りて出来あり
鏡の文乃ふ宮の書あきらめて
一云ふ此鏡を
鏡みいまゝ世りふ
鏡と海に捨りと云鏡紀伊国去船川乃
泰みおれきてきて乃人みを
我ハ是伊勢の神祇乃鏡と法流宣をき
鏡て鏡を作よ利れあけなて文武を作
日国化国宗き紀伊乃国并文を山
日形の鏡の事扱伊勢乃鏡とも山事

一伊勢乃紀伊の国を作りたゝ
一雄渡女と申ハ雄渡ハ任いやき女の事乃
一泊瀬女と申ハ瀬の女なる所なる花山姫の事
乃り山姫山の神の事乃り
一初瀬ハ古月乃吹瀬と二日三日まて
日吹初秋也一系武初瀬乃
一菊坪延拾し秋乃り大内乃瀬乃事乃り
一宗此瀬大内瀬乃
分へ
一萩原大内乃瀬の名と萩と陸奥と秋乃り

一春乃洞者之花之大門乃内事之
一梨坪 夜坪 柳坪 花坪 花坪 ハ雜乃
一者此花初者之百年乃一度内花咲之花
十度と之千年ニ十度花咲之祝乃内利
一者此初緑初者之緑みとり之新葉何も
者乃内 柳乃緑と者花と雜乃利
一花桂 桂咲ハ者之桂ハ雜乃
一春乃七種四月乃内乃菜乃事乃
之乃乃 一世乃菜 こきあへ たひ菜 こ行菜
一者乃内 夜ト也 者乃花之七種

一秋乃七種七月乃内乃多乃内
之乃乃 一あさ乃や萩 桔梗乃内乃七種
昔之ふへし花七種
貴合 一乃内乃むや秋乃七種乃花さと乃
一者乃内 四柳 前ト中ハ昔之 天武天皇
御世弘時 弘お神代乃事と法初法中乃
此事 乃ち 花 乃 乃 乃 者之
内乃人 ハ 乃 乃 天平 乃 花乃
乃 者乃 ハ 花 乃 乃 天星と すき
内く思 花 も 書 積 者 之 乃 内 乃

所々法岡より北市浦伯と北次之郡へ
者し岡橋左之方の今を人に又今を北羽黒山
市浦物元々氣禁より北奥を北
次之郡へ人心去程北今を郡とあり
と付へ北奥之之八腹の赤き奥之去程
川を山奥ありと云氣禁ハ肥後之岡
長岡の浦を云所ハ腹赤の奥之
去程を天武天皇北市浦寄ハ去程
ありと云所ハ
・代を隔て岡橋羽黒ハ

一秋宮乃屋ニ有秋ニ屋浦乃須屋ニ有月の
浦須屋ニ月を秋ニ雲風の屋ニ秋ニ光れ屋ニ
月も也ニ雲ニ浦の屋ニ月
一竹の浦竹の橋竹の泊加茂の名所ニ月
泊所
一嶺元芳の岸ニ光れ屋ニ織女乃家を書そ
岸乃家め嶺を知て硯の名ニ出るなり
一吉田とていふ所有なり
一もてゆふ文字(つい)ニ木綿を秋ニ稲をかけそ
木と田ニ解み依事を云

一次ニ乃山屋ニ月と稲と菊とを付る事を約束ニ
中納言三年次ニの屋ニ住猿乃ニ月と稲と菊
と独て詠猿いり　約束の事ニ
一次ニ乃浦の吉ニ山屋ニ月ニ
新ニ毎乃神の吉そ出る
一千屋と云を屋と云いたん秋毎ニ月
菊植て乃次ニの浦人
次ニ月千屋と付を嵯峨と松浦と付を約束
ニ乃
一吉野乃浦古ニ月とまやを以あん

また浦人塩竈より来る

一泊瀬乃海士小舟とゝを苫泊瀬八大海乃
おなじく海士人綱とれ引家之海士
人觀音堂現地にて海士人とありて市後
み鉤を魚遠孫に作り泊瀬み堂と
ゝ山海士綱引るみや刈觀音堂御堂
遠と泊瀬乃海士小舟と海士家て一句み堂
遠い海士人ゝて句
の句海士小舟とゝ出れ八実乃海士小舟乃
泊瀬の海江とゝ苫此海の綱引今を

塩竈とゝ
一霜み鏡を作る事八大唐み引遠い寺と
い山寺れ鏡に家とゝ乃ゝ此十月み成
て京枕のさゝ乃ゝ御せ遠ゝ面とみたる
明智鏡ゝ山鏡を竈鏡とゝ乃ゝ鏡
とゝ出れ十月の頃乃十月と鏡月とゝ
十月れ教句ゝ竈鏡と書てゝ乃ゝ鏡とゝ
・枕をけてゝ乃ゝ鏡の名月
一庭鳥乃吳服乃ゝ海士家ゝ海士家とよ乃
ゝ乃鳥見ゝ

一格子の岩屋は岩戸は見ハ高く国ゝ天の
岩戸見之仲勢ゝ天乃岩戸ゝ中之を
高乃格子の岩屋成説所
一千ゝ乃北海ゝ之と生乳を所ゝ張乃
海之千ゝ乃山海通とゝや奇美素集み
東山しとむらさきたちたる形ゝ面
千ゝ乃海み垣そうちゝる
一国乃姫とゝハ吉国乃守護の長姫ゝる立
形の事之一ヶ国ゝ一国并ゝ形ゝ数ゝ
国の姫成し

一琴柱乃文とゝハ八橋乃古妹とゝ古事なり
花ハ紅紫紅後の国を寄り姫ゝ神ゝ
古姫なり也姫とゝハ山吹乃文の
古事之紅紫とゝ句あゝハ吹ゝ撫ゝ乃数
れ姫ゝ古ゝ宮山とゝ形み也ゝれ姫ゝ古姫
ゝる良山ゝ姫ゝ山とゝ姫ゝ形
数ゝ乃海ゝ良山ゝ
初ゝ会ゝ
一枝垂梅之麻の葉ゝ
一ゝ乃花 羽蔵 羽蔵 花ゝ蓮乃葉

一ゐみうらの寺とハ今度の寺社事ニ源氏の
大将まつ見ハ見る文ニ志ゐ引寺
なりさてゐみうら社寺みハ見ハやうと申 詞
寄合ニ引やうハおこりとゆゑ物やう社事
所利 連歌ハ見ハやうと云
一小山み雅ゐを付る事ハ源氏むすさ紙の
上とりて小女ハ雅小山みを紙ひ引み事ニ
雅ゐ紙飼紙ゐ家乃上と云み雅ゐ附
一栗井ハ四月栗井乃浦ハ日本社事ニ書ハ
のもゝめの時ハ井ハ内ゐ云ハ栗のゐく

みゐを生そゐ引ゐ板井引ゐを栗井ハ
四ゐ云

一東野若取ニ内ゐ四井あ利
一ゐ東山桜ハ井あゐ云ハ事ニ書ハ
栗乃句を句引ゐ時ゐ東山ゐ
一里乃海ゐ云ハ若取ニ云ハ四ゐ紙乃四引
みゐ実ハ海ゐ井ハ里海ゐ云ハ桜乃お
ゐ

おゐ ・里ハ海乃塩屋を書みゐ云ハ書
栗栗み 煙ゐ原のゐ引ゆゐゐを取

一 浦風になびきにけり里の海士の
焼藻塩の煙心よわさよ

一 人乃手にわたる事 万葉集に
一 関も流れに堰かゝる花宿川
人乃心君がやうす川

一 命ならぬと申事 万葉集に
又晩人とは定めぬ身にてかくなれ
命乃あらのうかれ云事なり

いはう
一 白鳥とは鳥之雛乃異名なり
一 白いさぎとは雛鳥なり 翡翠ト云鳥之澤川

あとみ鳥とも云事なり
一 ひとすみ鳥とハ山しとと云鳥之雑なり
一 日暮ぬと騒ともやかて深山路に
人をこそ時ほよぶ鳥

小入云系之
一 大をそ鳥とハ鷹鳥乃事なり
一 浦千鳥とハ鶺鴒乃異名なり
一 ちゝれ法とハ雷の事なり
一 鏡乃宮と申ハ伊勢にて侍る之神明
乃御事之 伊勢の鏡の宮みハ二見乃浦又ハ
神路山と付へし 右にも日形の鏡松浦に

筑紫し熱田別筑山筑の文の事に郡名を
あり文は此筑とハ九州共に後鏡の字筑の
文なり鏡の文は事 取て指掌し
一竹林七賢人 一嵯峨 一院務 一院咸
一岡秀 一劉伶 一王戎 一山涛 以上七人し
一坪北花ゆと云事ハ田村の將軍東國に下
り給ふ常陸の國乃府内に坪と云所あり
其花ゆ花なり云花面に引花すと云日本
此中哭と云坪花ゆとハ云也
一こもの下名とハ三本高く花て花なり

一みとり此花物の吳花愛匂ふ
愛 一ゆ高山やみとり此花のとりくよ
ゆき人也ゆ井の神乃ゆ未綿
一ゆ也乃ゆ原位ゆ吳花形
一此酒花桃の吳花し三月三日此愛匂ふ
ゆ
一三千年花おなし 桃花なれ
一四月ゆ也乃此花と云 父丸乃塚ゆ
一ゆ 一ゆ乃松の風ゆ
一ゆ秋ゆ也 乃花の風ゆ
あり此屋此むり ゆ云

一野島か崎と云ハ岩なり 淡路国 摂津国などに
の国にもの名ハ難波にあり 又江ニハ志賀にあり
一こけ乃遠島 摂津国 何も其所乃名所也
一車舟とハ津乃国兵庫の浦和田乃岬浦を
廻る舟を車舟と申なり 云舟
一車社和田乃こ浦を見所その
なやくも従る淡路し海山
一絵島淡路国也 須磨の前也 塩焼所也
一浪男柏とハ海中の岩に生る貝と云貝なり
一岩し柏とハ岩に生る松さを云 古歌ニ付也

一玉柏拾とハ実の貝を拾と云也 只玉柏とハ海
中にある藻を思ふ乃あるき事にたとへてよめり
哥 難波津の蘆にまじれる 玉柏
あらはてたまに見えさりし 見えやハ
一三乃手柏とハ女郎花の事也 或云にハ児乃
柏の葉乃葉さきハ児の手に似たる故に 此草
柏にも引と侍り 実のハ女郎花なるへし
人に去て勝しとそ云侍る也 児と此手柏をハ
女郎花と名つて
一撫子の異名也 大和なでしこをさして云 大和撫子と云

一梅の枝うゑて三月ちるまで梅はなさき
数を付うゑと梅て三月ちるまで大裏にてかさ
して舞とまふを云是を差数のみふとを云
三月のみ数白うるとみよ
一卯枝と云ハ三月ちるまで大裏にて奈良桐
て備ゆ人の庭に枝と云是ハ卯花方に
ゆる桜の枝柳れ桜松乃枝三の枝と云て実
五寸に切てさきて集枝に云奈良桐とあ
卯枝付へし　京にて十二月迄さきて居申
一遠里小野是ハ住吉とありけんを也へし

一きそいうとハ五月五日　京にて桂枝
一たゆかりとハ秋に八九月松茸とやうさい
ら弟殿山入て本に子をひろと云事に桂枝
一本に桑の星花面に云桂枝山城乃岡に花
あり也
一孤と云女房乃名をみやき入らむに云とたま
きはゝなり
一十二月乃花鳥の事宮家卿に時に御門の
依勅花一鳥一花夜中に花者に宮家ゆう
　寛三月　柳枝に花に花者雑に云と在原
　ちり

寛三月卯花忍橋柱子丑山郭公鶯鶯の
秋三月咲女郎花萩薄鶴丑鶏鳴
冬三月残菊枯枝小梅乃花落梅落葉
雪ゆき

一物と手枕とよめる歌古今ゆき
一咲花ハ手枕ゆゑにあるゆえと張ハ恋と恨と
一玉寝覚の手枕ハ尺ゆ情だ玉ゆ山の霧の
陰ゆ

一大上乃床丑ハ花九川なり古今三月月ゆ
大上の床の山ゆ花ゆ川

いさと答て我ゆ名ゆ書
一花乃ゆ丑ハ女ゆし物ゆ丑花前ゆ物ゆ
一たまさゆ丑ゆ中ゆ紀あゆ丑ゆ物ゆ川
いさと答て我ゆゆ書
一富士乃答ゆいゆの事
むゆ蜀ゆ乃林席丑竹乃前と云人あり
式ゆ竹と云て尺ゆ巻迄ゆ丑牛丑答
乃ゆいゆ丑ゆいこ金色ゆて我ゆ家ゆ丑て
とくして尺迄ハゆいしゆ乃牛ゆゆゆき姫表
おゆりしを姫ゆ男ゆてそそけゆ丑

と御門主にて元亨年間一張弓を
かくや姫とそう天人の来人心さかくや姫俄
天上方御門跡と悟ませ張子事かき
尋ねし由形見とて鏡を渡せ張子事
三位式部卿殿と富士みうたを張子事
仁王三十代欽明天皇北御門とかや仏教元
の初祖み鏡のゆたしるし北門いしまいしぬを
尋原氏物語みをよりを什利志の御鏡
うやみ方鏡之寓 陸奥 この道の家より九説
とそきうさうより一ヤ伝る

一山吾れ鏡を尋ね峰と云る時内み云く伝道ち
次り書加へ中ちり　ニすまり
山吾乃おろれ初もみ鏡子
とな一首ミそ何よそりりん
式鏡乃と後れのいてるだ行みそ尺て云事
ち道れ者陳れ国より山吾と者中人然
を見ると云り御門岳とて飼張子事
み峰事形あまち乃女御ニ式山吾ホ云
角ん人をあれたと伝道岳花よ
ち見とし張ひ道と東京毛事一人

の女御友ときこえ給ふかぬありと思ほてあき
鏡を鋳所鏡をも鋳乃閉まて白りも逆もよ
ろこ寄りけし抱きて尾をおさへて鏡乃面
にあてゝ鳴けり是ふよりて此女御鏡を
鋳ひけりとなん是を呼子鏡といふとも又呼子鏡
しこそ）何よそりけんといふ何も前に記せりとし

友なくてたるかみきく清山寺の
鏡を見てそ鳴なしめ給ふ

ひとりゐる壺山鳥の影さへく
く見を見てそねきものとをなく

一 此寄を此鏡乃名をよめるも見ゆ

一 又伝ふて鏡の事書入且作り昔日
天照大神天乃岩戸にこもり給ひし時諸神
乃たくみ手をもて天のかく山乃さかきを根こじて
岩戸の前に立て上つ枝には玉をかけ
中つ枝に鏡をかけ下つ枝にはぬさをかけて
神楽をそうしけりと定家卿

さかき葉に此榊にかけし鏡にそ
君かと祝ふ千代の影を見ゆる　定家卿

一 ますみの鏡といふ月の名なきをいふ

一山乃たゆまずして強けくうと
見れば乃を用れば有り有り
一山科乃諸山の中に天智天皇陵と記す
前御の時当年世不明にて古臣
記を当たるなり　神下集終
右乃日今時欽通大概而集要件
弘能元年甲子誕上旬之朝
于時長拾六年辛亥迄
武百八拾八年なり

一日乗みるに大和之事
あさまたとハ書れ乃乃宮乃別
欽ゝ能立あさまたを乃むを迄
山　諸乃ゝ乃ゝ時乃ゝ
ゆや芦とハ其乃朝の宮なり
家ゆや夜れ宮の村せゝ能多
之て乃田あれ邪吉乃紀
きれ京ゆとハ秋の乃乃宮なり
欽ゝきゝ市ゆ乃乃宮を八之者の
立田乃道を用ゝく有

桜井寺と云ふは光孝朝の元慶
元年に寺院を建てられ迄六年
建立なり迄降ること
一橘麻呂ハ六月乃あさを云麻呂丹花を
咲あく那寺を云橘麻呂丹花を咲
て出へし六月の殺生丹はし山橘麻呂
前花有り三の山陰の次第と書と
中宮御宮丹書写す時書入る
一宇治之寺と云三井寺ノ智證大師御号也
高く光を尋ねけるも

六十年乃春あひ丹ひらけ　智証大師
　　六十の御年
一梵燈菴主云ふ九月丹まうら行時の寄
　　一屋かり丹入ぬる五十年九年
　　人知ぬ所を志ひらふ
一五人筑紫安楽寺　宗梅花枝折り丹ひらふ　三月乃
　　一情形おろ人ひらし我ら宿乃
　　形ちあるし
一住古五人乃年かく花を梅花立枝を
　　一人なりたと云ふ物を住乃仁の
　　形ちを　松を いくたび老ぬ春

新左と住左の法事あり

いう方り何年を孫を住左の

松を二度お元を刊ぬ

前の寄せ法師寄とき左なり

一 月

一 吉日の樓本れの神南国堂し寄法師寄

一 ぬいらくや南北片み芸しそ

今をさう屋小乃表なし

一 住左の法師寄 夜や寄きき衣や猪きかしを乃

一 和泉或紀の小弐紀みをく迷てかくを 新左

一 意見を呼ぶたみき弟達のとを

新左 村を南 時乃 ちを紀

皆人乃ちを良ちを知ぬかの原を

形ひをとい 意

一千載集をを元俊成卿

一 行を弟を秋迷をを丑子人やあ孫む

首を四ふんを元り 先を新左ちり

昭和十年十二月十五日

[illegible]（[illegible]）

[illegible]

福井久蔵先生